

拒否された過去・再び見出された過去

—— Daniel Leuwers 著『Jouve 以前の Jouve,
またはある詩人の誕生』を読んで ——

谷 口 正 子

人間にとって、過去を抹殺することは果して可能だろうか。また、そうする権利があるのだろうか。公の場に作品を発表することをなりわいとしている作家・詩人の場合は、この問題をどう考えたらよいのだろうか。Pierre Jean Jouve (1887-1976) は、過去の根跡を消し去ろうと試みた詩人である。1928年、彼は1924年以前に書いた自分の全作品を否認し、絶版とした。そしてそれ以後、半世紀以上の間、これらの作品が読者の目に触れることはほとんど不可能となり、また、これらについての論評が行われることも極めて稀となった。

1980年、一つの博士論文が、詩人自身が切り捨てた過去に初めて光をあてた。⁽¹⁾ 昨年(1984年)の一月出版された、Daniel Leuwers: *Jouve avant Jouve, ou la naissance d'un poète* (ジューヴ以前のジューヴ、またはある詩人の誕生) は、この論文を短くまとめたものである。1976年、Jouve は世を去る。詩人の死それ自体はもとより惜しまれるべきものであることは言うまでもないが、この本は当然のことながら、詩人の死を待たなければ公にされえなかった。(詩人の意志を逆なでしてまで彼の過去をあばこうとする者はいなかったのである)。

何はともあれ、この大業をなし遂げた Daniel Leuwers の努力に敬意を表することからこの小論を始めよう。Jouve の生前、彼の経歴を語った記録は少なかった。詩人自身が書いた『鏡に、日付けのない日記』(*En miroir, journal sans date*, Mercure de France), René Micha の『ピエール・ジャン・ジューヴ』(*Pierre Jean Jouve*, Seghers), そして、Canier de l'Herne その他に付された年譜——すべて Jouve 自身が納得したもののみが発表され、28年以前の Jouve の軌跡を正確に再構成することは不可能だった。博士論文を書くに際し、Leuwers は、Fonds Romain-Rolland, 図書館、個人のコレクションなどにあたって調べあげただけでなく、詩人の息子 Olivier Jouve, 孫の Catherine Jouve はじめ故人の関係者の協力をあおいで資料を得た。その一方で、絶版になっている手に入りにくい作品を見つけ出し、Jouve が葬り去ろうとした前半生の詩人像をつくり上げたのである。

しかし、筆者が Leuwers の研究を評価するのは、そうした文献的な功績だけではない。それ以上に、研究上の姿勢が筆者の期待を裏切らなかったからである。

この小論冒頭の問題提起に戻ろう。ある作家が過去を抹殺しようとするかしないかは、その作家の自由であろう。しかし、彼自身の意志がどうであろうと、文学史に残るほどの作品を書いた作家の生活が多かれ少かれ公にされること自体は、いわば仕方のない成り行きである。作家の生涯は彼自身のものであると同時に、それを超えてしまっているのだから。それは最終的には歴史にゆだねられるのであり、その意味でいずれにしろ過去の完全な抹殺はありえない。そして、Jouve 自身も、過去を否定しながらも、そのことを覚悟していたのだった。(論文を準備するに当り、Daniel Leuwers は何度も、Antoine-Chantin 街の Jouve のアパートマンを訪れているが、Jouve は、否認した作品に話が及ぶと、いつも、それらは文学史の領域に属し、宿命的に研究の対象となるだろうと、おどけたしぐさで漏らしていたと言う。) とは言うものの、それには一つの条件を付すべきではないだろうか。1924年以前についての研究が行われることは歴史の必然としても、それはあくまでも、1924年以後の Jouve 文学を基点として、そこからさかのぼるべきであって、その逆であっては決していけないし、前半と後半に対等の比重をおいてもいけないのではなかろうか。Jouve 文学の *originalité* は、あくまでも 1924 年以降にあり、Jouve が文学史上に残るとしたら、まさにその部分によって残るのだから。一般に、ある作家の死後、彼の意志に反して過去があばかれるとしたら、それは何よりもまず、その作家を文学史上に残らせた、他にかげがえのない *mérite* に全研究が向かう時にだけ、許されるのではないだろうか。時の流れに従ってであれ、それに逆行してであれ、この種の研究が向かう頂点はそれしかありえないのではないか。読者の好奇心を満足させるだけの せんさく であってはもとよりならないし、また、文献的な研究自体が研究の目的であっても決してならないように思うのである。

Leuwers の論文を熟読する前、内容を早くつかみたいと思い、序文について結論を先に読んだのだが、そこに〈Jouve の創作を、二つの部分に対立するというより、互いに補い合う二部作 (*diptique*) として考えることが可能〉とあったので、実は、一瞬不信の念を抱いたのだった。しかし、論文を細かく読みすすめるうちに、筆者の心配は杞憂となった。Leuwers はこのことをふまえて研究をまとめていた。副題の〈ある詩人の誕生〉は、まさにそのことの表明であったのだ。Leuwers の研究は、立ち返るべき基点を決して見失うことはなかった。一つ一つの事件、一つ一つの作品がのちの Jouve の作品とどのように関わってくるかを常に念頭に置きながら論がすすめられているのである。詩人がもって生まれた資質、性格、家庭環境、恋愛、結婚、交友関係、文学上の考え方の遍歴、与えられた個人的・社会的状況などのすべてが、1924 年以降の文学の結実に向かってどのように作用し、変貌していくか——Leuwers の研究は、いわばそうした追跡の記録とみてよいであろう。一人の詩人が自分の *voie* を見つけるまでの *itinéraire* をたどり、拒否された過去を再び見出して、それに前向きの光をあて、Jouve 文学の秘密と意味を一層明確に浮彫りにすること、これこそ Leuwers が論文によってなしとげたことであった。

前置きが長くなったが、この小論では、時代を追って記された Leuwers の追跡を、二つの核心となるテーマに分けて紹介してみたい。そして、一人の詩人の体験が「作品」化するまでの過程を筆者なりに解釈してみたいと思うのである。⁽²⁾

I 結 婚

なぜ結婚から始めるのか。Jouve 文学にとって結婚はおそらく、他のどんな事柄にもまして重要な関わり方をしていると思えるからだ。特に、二番目の妻 Blanche Reverchon との結婚がなかったら、Jouve 文学は決して生まれなかったであろう。しかし、そこに至るまでは、Jouve の第一の妻の地味ながら、これまた見逃せない貢献と、苦しみと哀しみの体験があったのである。

第一の妻 Andrée Charpentier は、1884年4月1日、Montreuil-sur-Mer で生まれている。二人の兄弟があり、そのうちの一人 Edouard は、Jouve の友人だった。Charpentier 家と Jouve 家は1906年頃から交際し始める。Andrée が、Jouve の妹 Madeleine の歴史の教師だったことがきっかけであった。まず Andrée と Madeleine が友情で結ばれ、ついで Jouve も親しくなる。Madeleine 兄妹の父はすでに死亡していたが、母の Caroline Charpentier 夫人も、Jouve にきわめて好意的であった。Edouard もまた詩を書いており、Jouve は彼と共に雑誌『金の目隠し布』(Les Bandeaux d'Or) を創刊するが、Caroline もそれに協力を惜しまない。それだけではない。この一家は Jouve にとってほとんど家族同様の役割さえ果たしている。1909年、少女 Lisbé との恋愛とその挫折、それに続くはるかに年長の女性との屈折した体験は、Jouve を麻薬へと向かわせ、彼は幻覚症状さえ起すようになっていた。それを救ったのは、Charpentier 家の人々だった。自分自身の家族と交渉を断っていた Jouve は、もっぱら彼らの好意にすがり、立ち直る。Jouve を麻薬からぬけ出させるために、Caroline と娘 Andrée は、彼にルネッサンス絵画の研究をすすめる、夫人はみずから彼をイタリア旅行に連れ出しさえする。その間、Andrée は Montreuil に留まり、一級教員資格者試験 (agrégation) の受験準備をし、合格する。1910年10月、Jouve と Andrée は結婚した。Andrée が Poitiers の lycée に職を得たため、二人はそこで1915年まで生活している。Jouve 自身も詩人としての carrière を一步一步着実に歩き出していく。Andrée は詩人の経済的な支えとなるだけでなく、創作活動の面でも校正その他を手伝うなどの献身的協力をしている。Romain Rolland はじめ多くの良き友人にも恵まれ、1914年3月19日には、Olivier という息子も生まれた。Jouve 一家はこの上なくしあわせなはずであった。もし彼らの前に、Blanche Reverchon という女性が出現しなかったとしたならば――。

Blanche Reverchon が Jouve の前に初めて現われたのは、1921年3月のことである。皮肉

なことに Blanche は Andrée の親友の一人であった。Jouve 一家がかつて住んでいた Genève で行われた女性による平和運動集会で彼女たちは知り合ったのだった。Jouve が当時師としてこの上なく慕っていた Romain Rolland にあてた手紙の一通に、彼は次のように書いている。
 〈ご無沙汰をお許し下さい。わたしたちのそばに Reverchon 嬢がいて、おおいに話し合っているためです。彼女は最も好感のもてる女性の一人で、すばらしいエスプリの持ち主です〉。^[3] Jouve と Rolland の共通の友人であった Stefan Zweig もまた、Rolland にあてて書いている。〈Jouve の家で Reverchon 嬢と知り合いになりました。あなたの姉上の友人とか。この魅力的で、繊細な女性とあなたについて話すのは楽しいことでした〉。^[4]

Blanche Reverchon は、1879年5月16日、パリで生まれている。詩人よりも八歳年長である。(Jouve は二人ながら才媛で、年長の妻にあたたく守られ、助けられて詩を書いたのだった。この意味では極めてしあわせな人だったと言うべきであろう！) 精神医学専攻の医学博士で、1927年、ウィーンにフロイトを訪問して以後は、本格的に精神分析にとり組み、フロイトの『性の理論に関する三つの試論』(*Trois Essais sur la théorie de la sexualité*) の仏訳も行っている。Jouve との邂逅当時は、精神科医としてジュネーヴで活躍していた。初めての出会いで、Jouve と Reverchon はすでにはっきりと通じ合うものを感じ合ったのではなかろうか。二ヵ月後の5月に、早くも Blanche によって靈感を得、彼女に捧げた詩『ジョコンダ荘』(*La Villa Gioconda*) を書いている。〈ジョコンダ荘〉は、当時 Jouve 一家が住んでいたフィレンツェの Villa Galileo, つまり二人が出会った場所の創作上の名である。〈新しい情熱が／流謫の身の歌人をとらえる。(……) こんなにも美しい宇宙のなかで、／詩人は見ている／人間の怒りがすべて／太陽に照らされる草の輝きのように消えていくのが！(……) すべてが、赦されたものたちのしあわせを／湖のおもてのように親しい閑けさをもつだろう。〉^[5]

なにもかも赦されて、ひたすら恋のしあわせに憩いたいという願いが詩全篇にあふれている。Andrée の入りこむ余地はすでに無い。同年8月、Zweig が Jouve と Blanche をザルツブルクのインターナショナル・スクールの講演会に講師として招いた。この講演に多くの要人が参加したことは若い Jouve を誇り高くさせたが、それにもまして Jouve を嬉しがらせたのは、Blanche と一緒に旅行できることであった。そしてこの旅行は、Jouve にとって、結婚生活においても作品上も、決定的なものとなった。Jouve は無邪気にも、この〈突然の小さな感傷的冒険 (aventure sentimentale)〉について、Romain Rolland に手紙で報告している。〈地平線には、まだ〔恋の〕苦しみがかかっています〉と。^[6] 1921年8月5日の手紙では、Jouve の告白は一層明白となり、厚かましくさえる。〈わたしは、すばらしくも恐しくもあるひとつの私的な悲劇を体験しつつあります。(……) 以後は、三人の関係を見つけねばなりません。三人の各々が純粋であり続けようとしています〉。^[7] 散文詩集『感傷的な旅行』(*Voyage sentimental*, 1922),

とりわけ『おまえ』(Toi)という詩の中にこの頃の体験がもりこまれているが、拒否されなかった1924年以後の作品、例えば『血まみれな物語』(*Histoires sanglantes*, 1932)にもその痕跡が見られる。〈三人〉のテーマがこのような体験から生まれたのだということが、この手紙ではっきりと解き明かされる。

8月9日、Jouve はついに Romain Rolland に手紙で助けをあおぐ。〈あなたのような「友人」だけが与えて下さることができるような、最も良い助言をお待ちしております。どうぞ助けをお拒みにならないで下さい。わたしは嵐のとりこになっています〉。^[8]翌日は Blanche 自身も Rolland に書いている。〈おわずらわせして申し訳なく存じております。(……)先週の初めには、すばらしい錯覚をしていました——今まで生きることを知らなかったひとりの人間がついに生きるのをまのあたりにするのが錯覚だとしたら、です。わたしは奇跡的な創造力が生まれるのを感じていました。そして、それに抵抗することはできませんでした。明日はどうなるのかわかりません——でも、閉っている扉は一つとしてないのです〉。^[9]〈Blanche は、詩人への自分の情熱と、《奇跡的な創造力が生まれる感じ》とを混ぜ合せている。《Vita nuova》と Jouve がのちに叫ぶ、作品と生活の一体化の基盤ができ上る〉と、Leuwers は書いているが、まさにその通りである。Jouve の要請にもかかわらず、Rolland は Jouve と会うことを拒否する。8月12日付の手紙で Jouve は書く。〈わたしの情熱を断ち切るにせよ、それに従うにせよ、三人とも不幸なのです。(……)もし生きることが続けられねばならないとしたら、三人の和解が必要です。わたしは二重の人間です。彼女たちを二人とも愛しているのです。あの二人もお互いに愛し合っているはずです。わたしは彼女たちそれぞれの異なった美しさ、気高さがそれなりに好きです。三人が和解し合うこと以外にどんな選択があるでしょう？——それともわたしが命を断ち切れればいいのでしょうか？〉^[10]

8月16日、Jouve は妻の待つパリに戻る。その後、Jouve にとっては長い葛藤と苦悩の時期が始まる。8月の終には Blanche もパリへとやって来た。Andrée は、夫に〈何かしら新しい変ったこと〉(quelque chose de nouveau et d'étrange)が起ったことに気づき、8月27日付の Rolland あての手紙では、もはや自分の悲嘆を隠さない。Jouve は Jouve で、Rolland に、〈自分よりもむしろ Andrée に手紙を書いてやって下さい。彼女にはそれが必要なのです〉と、思いやりのあることを書いている。だがそうしながらも Jouve は、Andrée との離婚を真剣に考え始める。Rolland は堅く反対し、Andrée を一貫して支持し続ける。Rolland と Jouve は、家族ぐるみの親しいつき合いだったのだ。Jouve もまた、一たんは家庭のたて直しを考え、仕事に没頭して苦しみを忘れようとし、1922年2月にはフイレンツェに旅行をするが、苦しみは少しも癒やされなかった。Andrée の苦悩はもとよりこの上なく、Jouve が一時かなり親しくつき合っていた unanimisme の作家 Vildrac や Duhamel にも助けを求めた。(Jouve は Rolland

と出会う前、unanimisme 運動に共鳴していた)。当時、近くに住んでいた Rolland にも、毎日曜訪れてくれるようにと懇願する。しかし Andrée のあらゆる努力も、Jouve の Blanche に対する熱情をそらすことはできなかった。先に触れた『感傷的な旅行』の中の『ディレンマ』(Le dilemme) という散文詩で、Jouve は次のように書いている。〈わたしは、わたしの腕に自分たちの腕を滑りこませている二人のものの想う女たちを見た。わたしはこのようにして、まるで地獄によっておびやかされてでもいるように見える桃色の家々のそばを歩いた。／信頼しきっている様子ときっぱりした歩きぶりから、わたしには左側に寄り添っているのがどちらの女性かがわかった。それはまさに、長年わたしの心に馴れ親しんできた彼女だった。／第二の女は、その現存そのものによってわたしを燃え上らせた。(……) わたしの中では、さらに恐ろしい火が彼女に呼応していた。その火があまりに激しかったので、わたしはもう一人の女である妻が、火花の散るごとに、わたしの腕の中で弱まり、死へと向かっていくのを感じていた。／その時わたしは、自分の恐ろしい未来を思った……〉¹¹⁾ また、この詩集で Jouve は、〈わたしは自分の血で書かれたことしか愛さない。血で書くことだ。そうすればあなたは、血こそ霊(esprit)なのだということがわかるだろう〉というニーチェの言葉を引用しているが、ここにはすでにのちの代表作『血の汗』(Sueur de sang, 1933) のかすかな前触れも見えてとれる。

1922年5月から23年の1月まで、Jouve は Zweig にのみ自分の気持をうち明けている。Rolland が Andrée の側に立ち続けていたからだ。22年の7月、Jouve は妻の許しを得てドイツに講演旅行した。Andrée は、それを許すことで夫の気持が戻るかもしれないとひそかに願ったのだ。しかし、Andrée の期待は甘かった。Jouve はドイツで Blanche と落ち合い、8月末日まで一緒に過ごす。また Jouve は、Blanche の働くジュネーヴで職を見つけようとさえしている。結局のところ、22年11月、Blanche の方がジュネーヴの職を捨て、パリに出てきた。詩人は Boissonade 街6番地にアパートマンを借り、1933年、Tournon 街に移るまで、そこで Blanche と居を共にすることとなる。その直前の10月、Andrée と Jouve は、共同生活に決定的なピリオドを打った。11月14日、Zweig にあてた手紙に、Jouve は次のように書いている。

〈誠意を尽くした結果、涙なしにと言うわけではありませんでしたが、ぼくたちは全員立ち会いのもとに、一つの了解に到達しました。そのことは《苦痛を最も小さくする》ことを可能にし、ぼくに関する限り、仕事を再開する力を与えてくれ、実際ぼくは懸命に仕事をしています。ぼくはこの家に一つのアパートマンを持つことができ、そこで生活しています。Blanche が一部を使っており、ぼくたちは一緒に仕事をしています(……)。しかし、ぼくは、ぼくたちは、Andrée と愛情のこもった、優しい関係を保っています。こうして、それについてはこれからも書くことはないであろう危機の後で、生活が少しずつぼくたちの中に戻ってきています〉。¹²⁾ 苦しみに耐えてあきらめ、ひき下った Andrée の心を、新しい愛に酔った Jouve は果してどの程度思いやれ

ただろうか。この手紙に、男性の虫のよさ、エゴのようなものを感じるとしたら、それは筆者が女だからだろうか。

ともあれ、この事件は、Rolland はもとより、大部分の友人や近親者の非難の的とならずにはおかなかった。Jouve はほとんど孤立状態に陥った。〈その時以後、Jouve にとっては、この課せられた絶交を、彼だけに特別に与えられた、有利な味方に変えることが決定的な問題となるだろう〉。⁴³ Jouve と二人の女性をめぐるいきさつを書いた章を、Leuwers はこのように結んでいる。

事実、のちの Jouve 文学の基礎は、Blanche の影響を受けて、これ以後急速にでき上る。Proust や Baudelaire、とりわけ後者への強い関心も、Blanche との出会いがなかったらあり得なかったかも知れない。その出発点には、Blanche に導かれて知ったフロイトの精神分析学があった。無意識界の発見は、Jouve を現代詩へと向かわせた。そしてこのことは、彼と Romain Rolland との間を、深い所から断ち切ることとなった。

ここで、Jouve と Romain Rolland との関係に改めて触れておく必要があるだろう。1914年、第一次大戦が始まろうとする頃、Jouve は Rolland の考え方に共鳴し、彼への敬意と共感を作品や Rolland あての手紙に表明する。そして、20歳近い年齢差にもかかわらず、二人は急速に親密な交わりを持つようになる。Jouve にとって Rolland は、一時期、文字通り全身全霊で傾倒する師であり、兄であった。この辺の事情は別の場所で書いたのでここでは繰り返さない。⁴⁴ しかし、彼らの熱い親交は、永続的にはなりえなかった。Jouve の Rolland に対する違和感の始まりから二人の決別に至る道は、Blanche の出現から Jouve と Andrée の決別へと至る道と平行して進行する。というよりむしろ、Jouve と Rolland との友情の破局と、縦糸と横糸のような形で織り合わされているのである。追って解明していくが、二つの現象の原因は一つであり、共に Jouve にとっては必然であった。

1923年6月6日、Jouve は Rolland に次のように書く。〈わたしはわたしの時代に従おうと(……)魂を傾けて努力しています。もし努力をしないなら、わたしの芸術もわたしも、過去の中に投げ捨てられてしまうでしょう〉。⁴⁵ 単に道義上の問題からだけでなく、Blanche の出現をきっかけに二人の芸術上の考え方が決定的に違ってしまったのである。6月12日以降、Rolland との文通はぱったりと絶える。24年に出る詩集『祈り』(*Prière*)には、後年の『パリの聖母』(*La Vierge de Paris*, 1946)を貫く Tout (全)と Rien (無)のテーマのきざしが見られる。Jouve は、彼なりに「神」を求め出す。フロイトの精神分析学と神の探求とが詩人の内部で結び合さり始める。これもまた Blanche の影響であった(Blanche は強い信仰の持ち主だった)。Baudelaire のように、Jouve も苦悩に意味を与え、苦悩を聖化する。Baudelaire が気づかずにわけ行っていた詩人としての道を、明確な意識をもって歩み始める。〈彼自身その広がりを知

らない Baudelaire の秘密は、Baudelaire が霊性と名づけている導き手を持った、「詩」の原動力としての無意識界の探求である。名著『ボードレールの墓』(*Tombeau de Baudelaire*, 1942)の中で、Jouve はこのように書いているが、創作に際しての彼のこうした姿勢は、Blanche の協力によってこの頃確立され、死ぬまで決して変らなかった。またこの頃、Jouve は Shakespeare を中心とする翻訳もかなり手がけているが、逐語的な下訳は Blanche が行っているようである。

1927年の初めから、Jouve と Rolland は十年以上にわたる不和の時期に入る。Jouve と別れた後でもなお、Andrée は、Rolland に次のような手紙を送って Jouve を弁護している。〈わたくしは、彼 (Jouve) が、あなたによって否認されたことを苦しみ、いつもあなたを必要としていると信じております。その苦しみをまぎらすために、数々のばかげた理由をつくり出しているのです〉。⁽¹⁶⁾しかし、二人の間にできた亀裂は、Andrée のいじらしい努力で埋まる種類のものではもはやなかった。この頃、Blanche の助けで、Jouve は新しい価値感に基づいた小説を書き始めているが、Rolland は『ポリナ1880年』(*Paulina 1880*, 1925)は賞讃したものの、第二作の『荒廃した世界』(*Le Monde désert*, 1927)は全く認めない。Jouve 文学の世界は、Rolland には完全に異質のものになっていた。⁽¹⁷⁾

以上で見たように、世間一般の常識的な考えから見れば、Jouve が、長年詩人に尽くしてきた Andrée を捨てて Blanche に走ったことは、人間として許し難い行為と言えよう。しかし、それは Jouve 文学形成の上でのいわば宿命的な成行であったと言えはしないだろうか。Blanche との出会いがなかったら、果して Jouve の文学は生まれたであろうか。Blanche と出会う以前の Jouve は、自分自身の道がつかめず、絶えず模索していた。そして、Blanche を知り、その影響で彼独自の詩的宇宙を創ることに成功し、それ以前の作品を棄て去ってからは、Jouve はもう決して迷うことはなかったのである。

このことを一層はっきりと確認するためには、Blanche と出会う以前の Jouve がどのような友人と交わり、どのような文学上の遍歴をしていたかを知る必要がある。

II 交友関係、文学上の遍歴

1905～1909年

1905年、バカロレアをとった18歳の Jouve は、国立高等工芸学校 (Ecole Centrale) を出て、技師になって欲しいとの父の希望を入れて、Lille の lycée の高等数学学級に籍を置く。これと平行して、Lille 大学法学部にも入学している。この頃、一人の青年が彼の前に現われる。数歳年長のベルギー人の友人で、妹 Madeleine の夫となる Pierre Castiau である。この友人によって、Jouve は哲学や詩への目を開かれ、彼に教えられて、Gourmont の『仮面の書』(*Le*

Livre des masques), Rimbaud の『イリュミナシオン』(*Les Illuminations*), Mallarmé の『詩と散文』(*Vers et Prose*) などを読む。初めて創った詩は、Maeterlinck の模倣だった。1906年、19歳の Jouve は、早くも自分の雑誌を創ることを思いつく。この雑誌は、Maeterlinck の詩『目隠しをした娘たち』(*Les filles aux yeux bandés*) の一節からヒントを得て、『金の目隠し布』(*Les Bandeaux d'Or*) と名づけられ、先に述べたように、Charpentier 家の援助で発行される。Jouve と Edouard Charpentier が主筆で、Paul Castiaux と Théo Varlet の二詩人があい継いで協力者となった。Jouve が、Mallarmé はじめ symbolistes たちの傾向で雑誌をまとめようとしたのに対し、Paul Castiaux は、Abbaye 派の詩人たちを参加させようと努めている。当時 Jouve は、Paul Claudel の荘大な versets にもひきつけられるが、¹⁸ 程なく再び Mallarmé とその後継者たちへと立ち帰っている。1907年には、Debussy にあてた献辞つきの詩を書く。またこの年、Castiaux に影響されて、〈abbés〉たちを訪問、次いで1908年には、Vildrac に手紙を書いているが、この段階ではまだ彼は、symbolistes たちと Abbaye 派の間を揺れ動いていた。この年、Jouve は神経症を患い、療養のためスイスに滞在する。1911年、彼は Jules Romains に初めて手紙を書くが、この中には、彼の若者らしい迷いがよく出ている。〈ぼくは、他の皆のように、Maeterlinck や Mallarmé の模倣をして、理解し難いものを書くことから始めました。しかし、ぼくが『金の目隠し布』に書き始めた、とても Claudel 的な一連の詩は、さらに新鮮で、さらに軽快なものでした。でもぼくはこうした詩を書き続けず、再び暗闇の中に落ちこんでしまいました〉¹⁹

スイス滞在中の Jouve は、詩集『アルティフィシエル』(*Artificiel*, 1909) を出すが、これは完全に Mallarmé 風の詩であり、また、Gourmont の劇作品『リリト』(*Lilith*) からの引用を銘句として冒頭に記している。Leuwers によれば、Jouve は〈『リリト』の中に、人間の生命の消し難い、普遍的な源泉〉としての〈エロティックな営み〉を感じとっていた。十五年後、彼が発見することとなるフロイト的世界の予感であり、それはのちの『失楽園』(*Le Paradis perdu*, 1929) 以後、Jouve 文学の本質的テーマとなる〈誤ち〉(*faute*) と〈性的な営み〉(*activité sexuelle*) へと結びついていく。『アルティフィシエル』のタイトルの後に置かれた四つの引用も、当時の Jouve が目指していた人工的な美を解き明かす。はじめの三つは、Mallarmé から借りられており、『デ・ゼッサントのための散文』(*Prose pour des Esseintes*) の二つの strophes——*L'ère d'autorité se trouble* から *trompette d'été* まで——からとられた第二、第三の引用に、当時 Jouve の愛読書だった、Huysmans の『さかさま』(*A Rebours*) の抜粋が続く。『さかさま』の主人公 des Esseintes は、Mallarmé の『エロディアド』(*Hérodias*) の一節、〈おお、鏡よ！／倦怠によって その縁の中に凍る冷やかな水よ／いくたびか いく時のあいだか 夢に悲しみ／底知れぬ氷の下の木の下にも似た わたしの思い出を探し求めて／お

まえの中に はるかな影のように わたしは現われたのです」を、とりわけ愛するのだが、これは、Jouve がのちに詩集の題名を『記憶』(*Mémoires*)と変えたことに関連づけられようし、また、この詩に出てくる〈鏡〉という言葉は、Jouve の後年の詩の中や本の題名としてしばしば登場する。このように Mallarmé や Huysmans にひかれる一方で、Jouve はまた、Lautréamont の詩もまた『アルティフィシエル』の銘句として引用している。しかし、Lautréamont への興味は、程なく Rimband にとって代られる。いずれにしろ、この頃の Jouve の詩は、まだ生きた体験によって十分に養われてはいなかった。詩人にとっては、本だけの世界からぬけ出して、自分自身の冒険をすることが必要であった。

1909～1910年

『アルティフィシエル』の出版は沈黙で迎えられ、Jouve を落胆させた。雑誌『金の目隠し布』も暗礁に乗り上げ、1909年には僅か一号しか出なかった。しかし、それ以上に Jouve の制作意欲をなくさせたのは、彼がもはや Mallarmé 的な不毛な難解性 (*hermétisme*) についていけなくなったことだった。かといって、Abbaye 派の人々の詩にも満足できなかった。この頃の Jouve は、Jean Moréas の、とりわけ、詩集『スタンス』(*Les Stances*)に見られる古典主義へと向っている。また、Emmanuel Signoret の影響も受け始める。同じ頃、彼は Paul Castiaux の家で知り合った画家 Henri Le Fauconnier と友情で結ばれ、彼の影響を受ける。のちに大きな成功をおさめ、パリの近代美術館に飾られる Fauconnier による Jouve の肖像画は、この頃描かれ、1909年の Salon d'Automne に出品されたものである。

この1909年、彼は、先に述べた重大な恋愛体験を共にする、少女 Lisbé と出会う。この体験は、のちに、小説『十字路での出会い』(*La Rencontre dans le Carrefour*, 1911) となり、それは更に、1930年の Jouve の最後の小説『深い年月の中で』(*Dans les Années profondes*)へと発展して行くのである。この恋愛体験については、Jouve 自身が自伝『鏡に』(*En Miroir*)で詳しく述べており、この小論はそれに触れる場ではない。また、この事件の後の Charpentier 家の人々の好意については既に述べた。Charpentier 夫人に連れられてしたイタリア旅行は、詩集『ローマとフローレンスのミューズ』(*Les Muses romaines et florentines*, 1910) として結実する。

ただ、ここで一言触れておきたいのは、Jouve 自身によって拒否された『十字路での出会い』と、拒否されなかった『深い年月の中で』との違いである。Leuwers は、共に実のらなかった恋をみつかったこの二つの小説について、次のように書いている。〈『血の汗』(*Sueur de Sang*)の序文のフロイト的な用語を用いるなら、Jean Santelier (『十字路』の主人公)においては、セックスの衝動は、言うまでもなく有罪性 (*culpabilité*) を供給する強力な《克己》という検閲をこうむっている。欲望と誤ちの Jouve 的テーマがすでに提起されており、それは間もなく、

精神分析的所与と、キリスト教的原罪の観念の大胆な融合のうちに、その表現を見出すことになるだろう」とのべ、《『深い年月の中で』は、《原初的な場面》(scène primitive) のフロイト的観念と決定的な執行の幻覚とを凝縮している》として、これら二小説の近さを指摘しているが、いささか前者を後者に近づけすぎではないだろうか。前者の愛は、まだ底に十分沈みきっていないように筆者には思われるのである。それに対して、《『深い年月の中で』と『十字路での出会い』の違いは、前者では、この作品がたとえ Hélène の死によって終わったとしても、エロティックな行為が実現したということである。しかし、この行為は Léonide が、Hélène に対して《彼女が持つことのなかった子供のように》自分を感じてこそ始めて可能となった。(……) Jean Santelier が Claire (『十字路』のヒロイン) に与えるいくらかの快楽は、彼自身のオナニー的傾向の変種に過ぎない。それに対して、Hélène との愛は、Léonide を完全に変えてしまう。(……) エロティックな行為は Léonide を高揚させ、彼を Jouve の小説のすべての男性の登場人物につきまとう創造的本能に目覚めさせるのである》²⁴と Leuwers が書いているのは、まさしくその通りであると頷ける。

エロスが罪と合致して甦り、女性が母となる Jouve 文学のテーマから、『十字路』はまだまだ遠い感じがする。Lisbé との愛の意味に Jouve が真に思い当るのは、1933年の彼女との再会まで待たねばならない。

いずれにしろ、この段階での Jouve は、人生体験でも詩作においても、自分の道を求めて激しく揺れ動いている。そして、イタリア旅行で目の当りにした〈古典的なルネッサンス〉の後で彼をとらえたのは、Jules Romains の unanimisme であった。しかし、そのことは結果として、Jouve が彼の真の〈領域〉を見つけ出すことを何年も遅らせることに役立つのである。

1911～1912年

1911年、Jouve は、Jules Romains の傘下に完全に入っている。この年につくられた長詩『変化する秩序』(*Les Ordres qui changent*) では、街と個人の調和ある融合が歌われている。また、続いて出た『飛行機』(*Les Aéroplanes*) も、完全に unanimisme に従っている。だが、こうした健全なオプティミズムは、Jouve の性向とはもともと相容れないものではないだろうか。再出発した『金の目隠し布』に、unanimisme に対する批判が混り始めるのに、長くはかからない。彼の批評の方針を明確化する論説の中で、Jouve は Rimbaud, Verhaeren, Claudel, Jammes などを師としてあげ、unanimisme を欄外に置いてしまっている。しかし、意識の上では unanimisme に従おうとする努力をしており、この頃、Duhamel や Vildrac にも近づいている。また、Romains, Duhamel, Vildrac の三人を自分の研究の中心とする、と宣言もしている。1912年には、詩集『現存』(*Présences*) が出る。

この詩集は三部よりなっているが、第一部中の『子供への讃歌』(*Hymne à un enfant*) と題

された詩は、甥の Jean Castiau に呼びかける形で歌われており、のちの Jouve からは想像しにくい主題で、Jules Romains に影響されたい語で満ちている。また、この頃の彼の詩に登場する「神」は、人間が神を支配できるとする unanimiste の考えとも違い、言葉によっては近づけない、望みもなくただ祈ることしかできない〈不可解な存在〉(Etre sans nombre)であり、後年の Jouve の「神」とは完全に異質のものである。

Jouve の unanimisme 的な詩は評判が良いとは言えなかったが、『現存』のみはかなり好意的に迎えられた。ただ一人、Henri Ghéon だけが、NRF の1913年2月号で徹底的に彼の詩を叩いた。Ghéon は、〈『現存』は、醜の美学によって絶えず抑圧されたデリケートな感性の悲しむべき見物をわれわれに見せてくれる〉と書き、最後に、〈いったい何時、Jouve 氏はこの“派”を去ることに同意するのだろうか？〉とまで書いたのだった。Jouve は、自分は必ずしも unanimiste ではないのであり、〈unanimisme という派は存在しない。(……)このようなレッテルは(……)批評家の精神の貧困さを補うものだ〉と述べて自分の立場を擁護するが、これは当然、Jules Romains の意に逆らうこととなる。

Jouve は、この派に組み入れられることを拒否し、1912年以後、Romains ととり交わされる手紙には、師であったものからの離脱の意志が表明される。『現存』への Romains の讃辞に対する返事として、Jouve が Romains に書いた10月29日付の手紙は、師との距離をわざと表わすかのようにタイプで打たれており、それは次のようなものである。〈ぼくは、事実を正確にするため、師である Jammes に書きました。ぼくは彼に言ったのです。unanimisme という語を、集合体から生れた神性 (divinités) を介入させる一派だけに限って下さい、と。ぼくの今度の本には、このような現実は一瞬たりとも問題になっていないのです。ぼくは Jammes に言いました。unanimisme 的気遣いが滲み出ていた『飛行機』について彼が呈してくれた讃辞をぼくは理解できない、と。それなのに彼は、あなたの主張にもはや全く負うていないぼくの初めての本を非難しているのです〉²⁰ その作品からは、unanimisme の影響がまだぬぐい去られてはいないとしても、Jouve は、Romains からの脱出を明らかに望み始めていた。

1913～1914年

Jouve が unanimisme から社会主義的傾向に移る時期である。彼に社会主義的意識を目覚めさせたのは、Poitiers の彼の住居の隣人で、友人でもあった Jean-Richard Bloch であった。Bloch は、〈社会的芸術〉(art social) の実現を目ざしており、その意図に基づいて『自由な努力』(*L'Effort libre*)という雑誌を刊行していた。第一次大戦直前の不安定な世相のなかで、自分の芸術のあり方を絶望的に模索していた Jouve は、なかば惑いながらも、Bloch のイデオロギーに急速に接近していった。

この頃、妻の収入だけに頼って暮す生活が心苦しかったのであろうか、Jouve はあるピアノ会

社のセールスマンになったが、長続きはしなかった（音楽を愛する者には容易な職業と考えて始めたのであろうが、仕事はそれほど甘くはなかったらしい）。ピアノを売りながらも、彼は創作活動を中断してはいず、特にこの時期は、劇作への情熱を燃やしていた。初めての戯曲『二つの力』（*Les deux forces*）を彼は Bloch の雑誌に載せてくれるよう頼んだ。港を建設しようとする技師とその恋人の銀行家夫人をめぐる金とセックスの葛藤を描いたこのドラマは、はじめ Bloch の気に入らず、手を入れるよう命じられるが、結局のところ、そのままの形で『自由な努力』に掲載され、これは Jouve の創作欲をあおった。次いで彼は、『クイユの太陽』（*Le Soleil de la Cueille*）という戯曲を創り、Bloch の紹介でこれを Jacques Copeau に届け、更に、足繁く Vieux-Colombier 座を訪れ、Copeau 自身に会うことにも成功した。ひき続き三番目の戯曲『イリュミネ』（*L'Illuminée*）を創り、これも Copeau の手許に送った。しかし、Copeau からは良い返事が得られぬまま、フランスは大戦に突入してしまった。『イリュミネ』は、愛の神秘をテーマとした作品で、Jouve のいわゆる〈回心〉後の第一作であり映画化もされた小説作品の傑作『ポリナ1880年』（*Paulina 1880*）との類似が感じられる。

ともあれ、Jouve の戯曲への創作欲は、ここで一応挫折してしまった。後年、Jouve が Shakespeare を翻訳したり、Mozart や Berg のオペラの評論に情熱を燃やしたのは、この頃抑圧されたものが、機を得て一度に吹き出した、と見てよいのではなかろうか。

一方、Jouve は、詩もまた書き続けている。この頃出た詩集『話し言葉』（*Parler*）は、先の『現存』の延長線上にある詩で、「夜」のテーマがとり扱われている。この中に登場する〈神〉は、*unanimisme* の衣をまといはいるが、のちの『聖人の夜のポーチ』（*Porche à la nuit des Saints*, 1941）を思わせる神秘性が色濃くにじみ出ており、むしろ Baudelaire 的な絶対への志向を感じさせる。

Bloch もまた、Jouve の変化に気づかぬはずはなかった。相違をお互いに感じ合ったまま大戦の前年を迎えた彼らは、切迫した情勢を前にして、芸術のための芸術を放棄することで一致した。Jouve は、死亡した『自由な努力』の一編集者の代りとして彼をこの雑誌のスタッフに加えてくれるよう Bloch に頼むが、答えの得られぬまま大戦は勃発、Bloch は〈革命戦争〉を信じて従軍する。これ以後、Jouve は、ぼっかりとあいた溝を埋めるかのように、当時 Jouve の作品を誉めてくれていた Romain Rolland に近づく。Rolland と一緒なら、〈破局〉の時代をのり切る努力ができると信じ始めたのだった。

以上で見てきたように、1906年から1914年までの Jouve は、*symbolisme* から *socialisme* へと、ほとんどすべての詩的立場を渡り歩いている。このことについては、〈こうした創作上の多様性は、不調和な寄せ木細工をつくり出すどころか、Jouve にあっては、むしろある種の定数と指針に従っており、彼の未来の作品がそれをしばしば証明することになるだろう〉²⁴ と述べて

いる Leuwers の見方が、全く正しいと思われる。unanimisme の、あるいは socialisme の下に、後年、精神分析学との出会いによって明確に作品の原動力となる、人間の深層部のドラマが、すでにはっきりと透けて見えるのである。

1914～1915年

Romain Rolland との邂逅の時期である。1914年、Rolland は48歳、Jouve は27歳であった。当初は戦争に反対していた Jouve も、Jean Jaurès の死や、リュクセンブルクやベルギーへの独軍侵入のニュースに接したり、友人が身の危険を冒して従軍して行く様子をまの当りにするとじっとしていられなくなり、良心の苛責めいたものも感じて、病弱の身を押して、妻の勤務先 Poitiers の伝染病院の志願看護兵となる。9月、Bloch が負傷して Poitiers に戻ってくる。正義に命をかけようとする生き方に Jouve は感動するが、彼の考え方への違和感はそのままだった。11月、Jouve は猩紅熱にかかり、一時病院を去るが、この時、初めて Rolland に手紙を出す。この手紙で彼は、単に先輩の作家としてでなく、当時傾倒していたトルストイに匹敵する生きた相談相手として、自分を導いて欲しいと、Rolland に訴えている。12月、Rolland から Jouve の期待を裏切らぬ返事が来、二人の文通が始まる。さらに Jouve は、文通だけでは満足できなくなり、直接会うことを求め出す。肺の重い疾患で看護兵を決定的に辞めた彼は、妻を説得してスイスへと転居を決意、そのことを Rolland に知らせ、Rolland もまた Jouve をあたたかく迎え入れるのである。スイスに移る直前、Jouve は詩集『あなた方は男だ』(*Vous êtes des hommes*) を出版、Rolland に届けるが、この詩集中の〈祈り〉は、キリスト教的な神に向かってというよりは、Tolstoy もしくは Romain Rolland 自身に似た「父」に対して捧げられているように見える、と Leuwers は述べている。

1915年10月、Jouve 一家はスイス入りをし、詩人は直ちに Rolland のいる Vevey へとおもむく。二人にとって、家族ぐるみのしあわせな交際の時期が始まる。

だが、子細に二人の手紙を検討すると、彼らの間には、すでにこの時期から微妙なずれが芽生えていることを、Leuwers は鋭く見ぬいている。直接出会う前、Jouve は『ジャン・クリストフ』を絶讃し、〈このような作品の中にこそわたしの祖国を感じる〉と書き送っているが、そのすぐ後で、〈しかし、わたしが賞讃するのは、その「芸術」(Art) というよりは、むしろ「信念」(Foi) なのです〉と書き添えているからだ。Jouve は、年長の友に、自分の生きる理由、信念を見出そうとし、一方、Rolland はそれに答えて、〈芸術家は、対立する要素の完全な調和の中に自分を完成しなければならない〉と教えている。Jouve はこの答えに満足できない。12月13日付の手紙で彼は、〈わたしにとって、到達するということは、はっきりとただ一つの見方で、方向を、意味を、役割を把握することなのです。わたしは一つの宗教的な形、おそらく、キリスト教へと向かうだろうと思います〉と Rolland に書いて師を当惑させているのだ。

1916～1917年

Jouve と Rolland との友情が最も親密だった時期である。Fonds Romain-Rolland に残された Jouve の数多くの手紙が、マルクス主義的平和運動家 Henri Guilbeaux によって創られた雑誌『明日』(Demain) への共同の協力を始めとする様々な時局への反応、Rolland への反対運動に Jouve をまきこもうとした軍人 Bouyer の事件、とりわけ、彼ら二人が Sierre で共にした幸福な生活などをはっきりと甦えらせてくれる。それは大戦という世界的な危機の時代と一致している。危機を前にして二人はしっかりと結びつく。

1916年10月、Jouve は、Rolland のために Sierre の Hôtel Bellevue に部屋を借り、そこに Rolland を滞在させることに成功する。Jouve 自身も、友人の画家 Edmond Bille の家に厄介になり、11月までそこに留まる。10月8日、Rolland は、Bille の家に友人を集めて、ベートーベンのミサ曲をピアノで弾いたりしている。Jouve は、Rolland との会話を記録し、師の伝記『生き写しのロマン・ロラン』(*Romain Rolland Vivant*)を準備し始める。会話のテーマは、主に平和や非暴力についてであった。当時、Tolstoy に傾倒し、仏訳された全著作を読んでいたらしい Jouve は、非暴力についての考え方を Tolstoy から学んでいる。手紙に表れた Jouve の言葉の調子が熱狂的なのに対し、Rolland は年長者として当然のことながら、終始冷静さを失っていない。11月、Jouve は Sierre に小さな家を借り、1917年4月まで、ひき続きここに逗留する。二人は頻繁に往き来し、Jouve は Rolland にひたむきな熱い友情を捧げる。この間、Rolland はノーベル賞を受賞する。Jouve はそれをわがことのように誇りに思う。1917年3月、彼らはロシア革命が起きたことを知る。〈ロシアの未来にとって、このような事件がどんなに重要であろうとも、わたしは現在の不幸がそのために改善されることを少しも期待していない〉と、Rolland は『日記』に書き記しているが、Jouve も師と意見を同じくする。この3月、Rolland は Jouve より一月早く Sierre を去る。

1916年から17年にかけての冬は、Jouve にとって、友情の面においても、作家として世に出る上でも、Rolland に負うことの極めて多い時期であった。

1917～1920年

この期間、Jouve はさまざまな体験をしている。まず、友人 Jean Salives の雑誌『タブレット』(*Les Tablettes*) の Tolstoy 特集号に協力している。折しも妻がジュネーブで教職を得、Jouve 一家はこの都市に落着く。この地で彼は完全に兵役免除となり、文筆業と平和運動に専念できるようになる。『タブレット』への協力を通して、労働者階級と知識人の連帯の可能性を知り、論説を書く醍醐味も覚える。また、Guilbeaux の『明日』から出た、『ロシア革命への挨拶』(*Salut à la Révolution russe*) という小冊子のために、革命による自由を謳歌する詩をつくっている。

さらに Jouve は、Jean Debrit の日刊紙『紙葉』(*La Feuille*) にも協力を要請され、毎日論説を書くこととなる。Rolland も彼の記事を評価する。しかし、ジャーナリストとしての Jouve は、それ以前とそれ以後の彼からは考えられないような記事も書いている。詩人としての彼の「師」である Mallarmé や Rimbaud を弾劾していることだ。戦争という異常な時代には、人間がいかにか本来の自分からかけ離れうるかの証拠を見せつけるかのように。

対人関係では、雑誌仲間との葛藤もあり、苦労が多かった。混乱した時代を反映して、人々がそれぞれ少しづつ違い違っていた。Rolland と必ずしもいつも同意見であったわけではなかった。この間、Jouve は詩人であることも忘れていず、詩集『死者たちの中で』(*Dans des morts*, 1917) を出している。この詩集は、Tolstoy と Rolland に捧げられ、反戦、自由、平和など Tolstoy 的な理想をこめて歌われている。革命との間に次第に感じる隔たりを Tolstoy によって埋めようとしているかのようだ。当時の Jouve は、また、Andreas Latzko の作品にひかれ、詩よりも *récit* へと移行していき、数多くの小説作品を読み漁っている。Tolstoy はもとより、Dickens, Gorki, Garchine, Dostoïevsky, Tchekhov, フランスでは, Barbusse, Anatole France, Maupassant など。1917年の12月には、長年の親友となる Stefan Zweig と出会っている。

1918年になると、Jouve は平和運動にも、ジャーナリズムにも疲れを覚え始め、芸術へと帰ろうとするが、その芸術にも絶望しかける。Rolland に手紙で悩みを書きつらねるが、その Rolland 自身も苦悩しており、安易な解答を拒否する。2月には、Chaux-de-Fonds の労働者サークルで、会場を埋める聴衆を前にして Martinet の詩を読み、大成功をおさめている。Jouve はスイスの有名人になり、詩集もたちまち売れ尽くす。しかし、彼の内面は、革命、平和運動、芸術のるつぼの中で相変らず悩みつづけていた。社会思想上の不確かさは、芸術上の不確かさと一致する。その不確かさを消し去るためかのように、Flaubert の読み返しに没頭する。この頃までは Rolland に対してまだ忠実であり、Rolland が流感で倒れた時は、看護兵の経験を生かして献身的に看護に赴いている。また、友情と敬愛の証しとして、以前から書き始めていた Rolland の伝記に一層力を注ぐ。Rolland の母の死、Jouve の息子 Olivier の重病などが作品の完成を遅らせる。

しかし、Rolland との友情の亀裂が少しづつ姿を現わし始めていた。11月11日の休戦の直前、Jouve はアメリカ大統領 Wilson の偽善ぶりを非難する手紙を Rolland にあてて書いたのだが、Jouve の期待に反して、Rolland は Wilson を「調停者」として讃える手紙を新聞に発表する。だが、何よりもこの亀裂を埋め難くしたのは、伝記とはば平行して書かれた詩集『夜の時禱書』(*Heures, livres de la nuit*, 1919) を、Rolland が好いてくれなかったことだった。この詩集は、数ヶ月先立って Jouve が小冊子として発表した『八つの孤独の詩』(*Huit poèmes de la*

solitude)で始まっているのだが、これらの詩の一部は、のちの『結婚』(*Noces*, 1928)や、『血の汗』(*Sueur de Sang*, 1933)を予告する、と Leuwers は書いている。²⁴『生き写しのロマン・ロラン』は、詩人の当初の意図を知らず知らずのうちに裏切り始める。先に述べたように、Jouve にとって、Rolland の価値は、作品よりもむしろ人間にあった。〈Romain Rolland の芸術は、より良いものへと向かう人間的なあらゆるものの高揚である〉と、Jouve は伝記に記すが、その直前には、〈形としての完成に心を配らない不完全な作品〉とまで、Rolland の著作を評しているのである。Jouve にとって Rolland は、当時彼が熟読していた Flaubert の正に反対の作家に見えたのであった。こうして、賞讃の書となるはずであった『生き写しのロマン・ロラン』は、いつしか疑問と批判の書へと姿を変えていった。

そして——こうした Jouve の惑いと変化がまるで招き寄せるかのように、時機を得て、1921年、Blanche Reverchon が、詩人の前に登場したのであった。

結婚、および文学上の遍歴の二面から以上のように見てくる時、われわれは、Jouve の〈拒否された過去〉の多彩さに、驚かされずにはいられない。文壇から一步離れた所で、修道僧のように、ただ一すじに彼独自のエロスと死のテーマを追い続けたいわゆる〈回心〉後の Jouve からは想像しにくい、悩み、迷い、求める青年詩人の姿がそこにあった。その意味で Jouve もまた、普通の人だったのである。自分の芸術を見出すために、また、作家として自分の作品を世に問い、残すために彼が折々に示した積極性、食欲さにも目を見はらされたのは、筆者だけであろうか。

Rimbaud のように、20代の初めで自己の文学の本質をはなばなしく生ききり、たちまちにそれと別れを告げて消えて行った詩人も存在する。しかし、Jouve はそうした類いの詩人ではなかった。直観を体験によって確かめて初めて自分を作品化しえたのである。芽を早くから抱きながらも、それを真に彼らしく芽ぶかせるために、長い探索と努力を続けねばならなかった。さだかには見えぬながら、その芽は少しづつふくらみ、熟し、Blanche との邂逅という機を得て花開いた。そしてその花は、さまざまな陰影と色合いで姿を変えながらも、本質的には、くり返し述べるように、以後決して変らなかった。

芸術史上に不朽の作品を残すほどの作家、詩人、画家たちは、彼らの独自性を作品化する「宿命」を負っており、そのために周囲の人々を、ある時は、彼らの意志に関わりなく、残酷に巻き添えにする。Jouve の第一の妻 Andrée、そして彼のために傷つけられることが多かったであろう Rolland をはじめとする師や友人たちも、そうした詩人の「宿命」に関わらされた人たちであったように思えるのである。

註

- (1) 未踏にならざるをえなかった分野の研究という意味で、まさにかっこの博士論文のテーマと言えるであろう。といっても、Leuwers は初めからこのテーマで thèse を書き初めたわけではない。1972年、筆者自身が thèse の準備のために事務局を訪れた時、Leuwers は既に M^{me} Durry の指導下で thèse を準備し始めており、その時のテーマ名は“Pierre Jean Jouve”という漠然としたものであった。Jouve の死後、詩人の前半生をよく知る Claude Le Maguet との出会いが一つのきっかけとなって、Leuwers はこのテーマにしぼったのである。(M^{me} Durry は論文完成前になくなり、Prof. Anglès が指導教授を代行した)。
- (2) 正直に言って、Leuwers の著書に書かれたことの多くは、筆者にとって新しい事実であり、時には非常に驚きでさえあった。長い間 Jouve を研究してきたとは言え、1924年以前の Jouve についての知識は極めて不十分であったのだ。その理由は、まず第1に、筆者自身が詩人個人の未梢的な biographie にはあまり関心がもてず、研究が自分自身の生き方と作品の本質との接点で行われがちになるためである。第2に、Jouve の1924年以降の作品研究さえまだ十分になしえていないのに、詩人が否定した部分の研究どころではないと考えていたためであった。第3、第4の理由は、すべての Jouve 研究者と同じであろう。本文で書いたように詩人自身が否定したものを、生前、その意志を逆なでしてまでとりあげ、発表しなくてはなかったこと。また、万一しようにも資料が極めて乏しかったこと。この第4の理由は、特に、フランス以外の国に在住する研究者にとっては決定的であった。従って、この小論に登場する1924年以前の作品で筆者が目を通せたものはほとんど無い。つまり、これらの作品は Leuwers の目を通してまず見られ、それに筆者自身の感想が加えられた形で紹介されている。その意味でこの小論は Leuwers に負うところの極めて多い Leuwers と筆者との合作であることをことわっておかねばならない。
- (3) *Jouve avant Jouve*, Klincksieck, p. 194.
- (4) *Ibid.*, p. 195.
- (5) *Ibid.*, pp. 196, 197.
- (6) *Ibid.*, p. 199. Lettre à RR du 2 août 1921.
- (7) *Ibid.*, p. 200.
- (8) *Ibid.*, p. 200.
- (9) *Ibid.*, p. 200.
- (10) *Ibid.*, pp. 200, 201.
- (11) *Ibid.*, p. 210. *Tragiques, suivis de Voyage sentimental*, Delamain et Boutelleau, 1922, p. 215.
- (12) *Ibid.*, p. 213.
- (13) *Ibid.*, p. 214.
- (14) cf. 拙稿「友情について——ジューヴとロマン・ロランの場合——」*堅琴*第12号 pp. 79~85.
- (15) *Jouve avant Jouve*, p. 219.
- (16) *Ibid.*, p. 271.
- (17) 『ポリナ1880年』が文壇に好評をもって迎えられたのに反して、当時この小説を見る目は、Rolland だけでなく、一般に冷たかった。内容・技法共に、新し過ぎたためであろう。この辺の事情については、*Jouve avant Jouve*, pp. 273, 274. に詳しい。
- (18) のちに、Jouve は Saint-John Perse の versets を賞讃し、これに靈感を得て『オード』(Ode) を書いている。
- (19) *Jouve avant Jouve*, p. 40.
- (20) *Ibid.*, p. 59.
- (21) *Ibid.*, p. 75.
- (22) *Ibid.*, p. 94.

- (23) 独自の詩的宇宙を創ろうとする Jouve ではあったが、当時、活発になりかけていた Dadaïsme とは無縁であったらしい。Tristan Tzara が Tablettes に送った Dada 第1号を見ながら、何の関心も示さなかったという。スイスにいた Jouve は、Breton, Eluard, Aragon, Soupault から新世代の詩人たちの活動を知らなかった、と Leuwers は書いている。